

昔むかし、北の国に、ひとりの男爵だんしゃくがいました。男爵は、力の強い魔法使いで、これから起こることが何でもわかる本「運命の書」を持っていました。

ある日のこと、息子が四歳になったとき、男爵は、息子の身にこれから起こることを見てみようと考えました。「運命の書」を開いてみると、そこには、こんなことが書かれてありました。

「ヨークの大聖堂のかげに小さな家がある。そこで生まれた娘と、息子は結婚するであろう」

その家はたいそう貧しくて、しかももう子どもが五人もいるということです。男爵はあわてました。もっと身分の高い金持ちの娘と結婚させたいと思いました。

男爵は、馬でヨークへ出かけて行きました。大聖堂のかげに、みすばらしい小さな家があつて、戸口の所に、男が悲しそうに座っていました。男爵が、

「どうしたのだね」とたずねると、男はいました。

「ああ、旦那だんなさま。もう五人も子どもがあるというのに、いま、六人目の子が生まれたんですよ。どうやってやしないばいいんでしょう」

男爵は、

「元氣を出さない。わたしが君を助けてあげよう。いま生まれたその子をもらってあげよう」といいました。

「ありがとうございます。でも、どうか、かわいがって育ててやってください」

男は、赤ん坊を抱だいてきて男爵に渡しました。

男爵は、赤ん坊を抱かかえて馬を走らせました。そして、オウゼ川の川岸に來ると、赤ん坊を川に投げこんで、そのまま自分の城に帰っていきました。

赤ん坊は、少しも沈まないで、川を流れて行きました。やがて、漁師の小屋の前まで來たとき、岸に打ち上げられました。漁師がそれを見つけて、おどろいて自分の家に連れて帰りました。赤ん坊は、漁師夫婦にたいせつに育てられ、十五歳になるころには、美しい上品じょうひんな娘になりました。

ある日のこと、男爵が、仲間たちとオウゼ川の岸へ狩りに出かけました。そして、漁師小屋まで來ると、何か飲み物をもらえないかと声をかけました。すると、ひとりの娘

がグラスを持って出て来ました。一行は、娘の美しさにおどろきました。

仲間のひとりが、男爵に、

「あなたは、運命を知ることができると聞いているが、この美しい娘はだれと結婚するんだろう」といいました。男爵は、

「そんなことは簡単に当てられるさ。娘さん、あなたの誕生日はいつだね」といいました。娘は、

「存じません。十五年前に、川がわたしをここに連れて来たのです」と答えました。

男爵は、この娘がだれなのか分かりました。そこで、手紙を一通したためて、娘に渡していいました。

「お聞き。わたしがおまえを幸せにしてあげよう。スカボローに、わたしの兄が住んでいる。その兄の所に、この手紙を持って行って渡しなさい。そうすれば、おまえは一生の幸せを手に入れるだろう」

手紙にはこう書いてありました。

「兄上、この手紙を持って来た者を、すぐに殺してください」

娘は何も知らず、スカボローに向けて旅立ちました。

旅の途中、娘は、ある小さな宿屋に泊まりました。その晩、盗賊の一味が宿屋をおそいました。娘は一文無しで、持っているのは一通の手紙だけでした。盗賊たちは手紙を
読んで、

「なんて恥知らずなやつんだ」と腹を立てました。盗賊のかしらは、手紙を書きかえしました。

「兄上、この手紙を持って来た者を、すぐにわたしの息子と結婚させてください」

かしらは、手紙を娘に渡して、出かけるようにいいました。

娘は、歩き続けて、ようやく、スカボローの屋敷に着きました。ちょうどその日、男爵の息子が屋敷に来ていました。男爵の兄は、手紙を読んで、すぐに結婚式のしたくをさせました。そして、その日のうちに娘と男爵の息子は結婚しました。

それから間もなくして、男爵が、兄の屋敷にやってきました。自分の息子があの娘と結婚したことを知って、男爵はどんなに驚いたことでしょう。けれども、素知らぬ顔をして、娘を散歩に誘いました。

海辺を歩いて崖の上まで来たとき、男爵は、娘を海に突き落とそうとしました。娘は、

驚いて命乞いいのちごいをしました。

「私は何も悪いことをしていません。命を助けてくだされば、あなたのおつしやる通りにいたします」

男爵は、自分の指輪を抜いて、海に放り投げていいました。

「ここから立ち去れ。おまえがああ指輪をわたしの前に置いて見せないうちは、二度とわたしに顔を見せてはならない」

娘は、どんどん歩いて、あるお城に着きました。娘はお城の台所で下働きをすることになりました。

ある日のこと、たまたまこのお城に、男爵と男爵の息子と男爵の兄がお客としてやってきました。娘は、自分の夫を見て胸が詰まる思いでした。けれども、だまって昼食のしたくを始めました。

娘がとてつもなく大きな魚を洗っていると、魚の体の中で何かがちらちらと光るのが見えました。おなかを切り開くと、中から指輪が転がり出ました。それは、男爵がスカボローの崖の上から投げ捨てたあの指輪でした。

娘は心をこめて魚を料理しました。召し使いがそれを広間のテーブルに運びました。

魚がとてもおいしかったので、お客たちは、たいそう喜びました。お城の主が、召し使いに、

「この魚を料理した者はだれだ。料理人をここに連れてきてくれ」といいました。

娘は、身じたくをして、男爵の指輪を親指にはめて、広間へ上がっていききました。お客たちは、娘を見てたいそう驚きました。娘は、男爵の前に行つて、指輪を抜いてテーブルに置きました。男爵は、運命に逆らうことはできないことを知つて、息子との結婚を認めました。

それからのち、みんなは、死ぬまで、これ以上の幸せはないほど幸せに暮らしましたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話6 イギリス』川端豊彦訳／ぎょうせい